

## リレーコラム 19

### キャリアの積み方—私の場合

## 卒後 15 年目の 小児腫瘍内科医の場合

京都府立医科大学小児科

柳生茂希

小児科医としての将来像、キャリアプランを考えると、「どんな小児科医になりたいか？」について考える時期が来ると思います。私は医学部を卒業してから、大学病院で小児科医として研修医時代を過ごしましたが、その頃を振り返ってみますと、当時自分の将来像についてはっきりとしたビジョンを持っていたわけではありませんでした。10年後、20年後に自分がどのような仕事をしているか？そんなことを考える余地もなく、患者さんに懸命に対応することで精一杯だったと思います。現在は小児腫瘍内科医として、大学病院で若い小児科医たちと一緒に勤務していますが、そこに至るまでにはいくつか遠回りをしたようにも思います。自分の進む道は小児腫瘍内科だ、と決めたのが卒後5年目でしたが、このまま病院勤務を続けてたくさんの患者さんと関わっていくか、あるいは大学院に進学するかどうかを迷った時に、ようやく「小児科医として自分は何をすべきか」について考え始めるようになりました。

当時、私は長い間主治医をしていた小児がん患者さんを失ったばかりでした。彼を最期に見とったあと、ご両親から「将来このような病気が治せるような方法を、是非見つけてください。それが私たちからの願いです」とお話をいただきました。その時に、「たくさんの研修を積んで、今ある最新の治療を患者さんに提供するのは医師としてあたりまえのことであるが、これから解明していかなければいけない新しい治療法を追求することも小児科医の仕事だ」と考えるようになり、大学院に進学することにしました。その後、私は縁あって米国に留学する機会を得ましたが、研究室には私のように博士研究員として働いている留学生がたくさんいました。また、たくさんのレジデント、小児科フェローが臨床業務の合間に研究に従事していました。彼らは自分たちのことを pediatrician だと言いますが、同時に scientist だとも言っていました。そして、scientist としての自負と将来像を持って、physician としての業務の傍ら、いかに scientist として情報が発信できるかを考えて臨床研修を行っていました。これは、私が目の前の業務に追われるままに過ごしていた研修医、修練医時代には決して抱いていなかった感覚でしたが、彼らのように、若いうちから physician scientist としての自負と10年後、20年後の将来像を持って研修を行っていたら、自分の将来も少し変わっていたかもしれないと感じました。

小児科医としてのキャリアには沢山の選択肢があると思いますし、出会い、進学・留学、家族、など様々な要素が関わってきますので、正解も失敗もないはずです。私も、妻や両親のサポート、患者さん、理解のあるメンターとの出会いがなければ、進学、留学はおろか、我が子の子育てもままならなかったでしょう。これからも、10年後の自分が何をしているか、何がしたいか、まだまだよく考えないといけません。人生の岐路にたった時に、「患者さんのためになる情報が発信できる小児科医になるためになにをすべきか？」と自問することで、自分が進むべき道を選びたいと思いますし、これからも若い先生たちと一緒に、physicianscientistとしてどのように研鑽していくかを考えていきたいと思っています。

やぎゅうしげき  
**著者略歴 柳生茂希**

京都府立医科大学大学院医学研究科小児発達医学助教

平成 12 年京都府立医科大学卒業

小児科研修、診療後、2005 年より京都府立医科大学大学院に進学し、小児がん研究と臨床に従事。2011 年より京都府立医科大学小児科助教、2013 年より米国テキサス州ベイラー医科大学、Center for Cell and Gene Therapy で細胞遺伝子治療について学ぶ。2015 年 8 月より現職。いつまでたっても頭が上らない看護師の妻と、英会話はすっかり私を追い抜いてしまった 10 歳の息子との 3 人家族。最近、趣味を見つけようと料理教室に通い始めました。

## 男女共同参画推進委員会より

### 「自分の将来像」

出産・育児に係わる勤務時間の整備によって、退職せずに勤務を継続できる可能性があることが、日本医師会の調査で明らかになっています。勤務時間の整備とは、①時間短縮勤務、②オンコールへの配慮、③産休・育休の利用、などが挙げられます。このような要配慮者数が増加すると、常勤医師の勤務が苛酷となり、結果として勤務配慮を受けたのち、子育てとの両立が困難と考えて常勤に戻らずに離職する医師の増加が懸念されることを、当委員会は第 120 回日本小児科学会学術集会（2017 年東京）で報告しました。離職する時期は、卒後 10 年を経過し、サブスペシャリティを持って専門的な仕事して自分の進むべき道を選択していく時期とちょうど重なっています。

労務環境は、地域によっても異なります。2018 年は、各ブロックの小児科学会で男女共同参画に関する演題やシンポジウムを取り上げています。活発な議論から自分の将来像を考える機会になればよいと思います。